

6. 第1次青海小穴調査から

第5次青海千里洞調査までの歩み

第1次青海小穴調査

——その苦闘を振り返って——

探検部 O. B. 松 本 澄 夫

我々洞窟班がこの洞窟に取り組んで早や4年の月日が流れた。しかし、この洞窟への挑戦は洞窟に慣れる者の自然の厳しさに対する挑戦といってよいし、これは我々探検マンの一貫したフロンティア精神の勝利といえよう。

この洞窟は探検部の挑戦を「偉大な自然に対する人間のおろかな行為よ」と思っていたかも知れぬが、5度にして、ほんとにようやく自然を征服したのである。それは、第1次・第2次調査の隊員をみれば長い道程を理解してもらえよう。私はこの当時の苦労話を中心に回想してみた。

この計画を練り出した時は洞窟班の危機が目前に感じた故、真剣に考え、率直に行動に移したのだろう。我々、洞窟活動も基礎段階の探検から岐阜県都上郡の熊石洞探検での学術、技術へと進み、一応我々の活動も完成期に近づき、部内に於いても海外派遣がちらほら聞こえ、又、行動に移す気運が高まっていた。これは、真の探検の段階に来たことを意味するのであって、海外で実施する以前に国内の手近な場所がないかという問題も起った。これまでの合宿が薩南諸島を除き準秋吉層に分布するものばかりでレンズ状の比較的小さな洞窟であった故、規模が大きく、未踏査のものがよいという条件から、堅穴探検の行なえる地を求めることになった。班員、わずか10名で図書館通い、地質図取り寄せ、博物館からの情報入手等、調査の進展に平行して現地の問合わせと各分担の責務をまっとうしてくれました。4月早々から始めた机上の洞窟探検も、5月末には現地の青海町役場松野氏から青海洞窟群概況なるものを入手し、部内にて、クローズアップし、検討の結果6月22日から26日の間に偵察することに決定した。偵察時は、松野氏よりマイコミ平へのコースその他周辺の地理の詳細を聞きましたが、洞窟所在箇所まで確認できなかった。町役場から福米口までバスの便が悪いので、歩いて行くのだが、梅雨期だということに容赦なく照りつける日射しを受けながらも、歩き続けられたのは、我々の活動意欲が旺盛であったからだろう。福米口より入山したのは昼も1時を過ぎていた。テラス状の採石場の頂上に辿りつくまでに約200の階段を登り、日本海を振り返った時、前途多難を思い知らされた様な気がする。海拔300mの辺りから雪溪にでくわしたのが幸し、遅れを取り戻したが、活動時に於いて

この雪溪の下に隠れていたひどいブッシュに悩まされ、計画の大幅な変更を余儀なくされた。探索予定のマイコミ平に辿り着いた時は、陽は山に沈み、その夜は、明日の行動を検討し、すぐに深い眠りに落ち入った。

翌日、午前中は東姥ヶ嶽、午後からは大穴、小穴の発見に努めたが、近年人っ子1人として足を踏み入れた者はいないと云われるこの山は、原生林に覆われ、また雪深い冬を越す木々は地面と平行に生えているため、我々の足は遅々として進まない。この悪条件と地形掌握不十分から、この日は1つの洞窟をも発見できなかった。偵察予定の日もあと1日を残すだけとなり、目の前にあるはずの巨大な洞窟を発見できない焦燥感に襲われた。明早朝、一番探し易いと思われる東姥ヶ嶽の確認に努め、それでもだめなら我々の手で探し求めるのは困難であろうから、現地のどなたかに協力を求め、なおかつだめなら、夏期活動に於いて、洞窟探しという地点から再出発せねばなるまいと覚悟を決めた。翌朝早くから努力したが見当らず、日本石灰の人々に御協力願うことにした。仕事中大というのに、我々の活動を理解して下さり、それにより偵察の目的もかなえられ、我々は、この上ない感謝の気持ちで下山したのである。それからすぐに、この「大穴」、「小穴」を中心として夏期の探検活動を行なうのに現地の連絡本部を井上さんに依頼したが、この洞窟が未踏の堅穴であること、また我々の探検活動が、冒険と思われ易い等、了解してもらえるかどうか不安であった。しかし、我々は、この疑念を計画でもって解いて行かねばならぬことを肝に銘じ、又夏期活動を青海洞窟群で実施するには、現地連絡本部は、日本石灰開発会社に依頼する他ないということで御相談した結果、その会社に勤務しておられる井上氏に引き受けてもらった。そのかわりと言っては語弊があるけれども、冒険はしないし、もう一度自分達の満足できる確実な技術を習得してくることを約束して青海を後にした。

我々の千里洞への挑戦は、この日から始まったといえよう。従来の活動を考慮し、一步前進させるために、活動準備を兼ねて技術練磨合宿なるものを実施し、青海千里洞に対する観念をたたき込んだのである。8月16日の出発の際には、私の判断できるところでは全隊員が精神的にも技術的にも探検可能な所に達していた。日本石灰の井上氏に説明又激励を受け出発したのは11時を過ぎていたと思う。今度は偵察時とは非常に異なり、とっつきの梯子段のところでもたつき、偵察時の雪溪は解け、猛烈なブッシュが生茂っていることや、45キロを越す肩の荷、夜行列車の疲れ、強烈な太陽の下での無風状態など悪条件がそろったこともあって全員バテ気味であった。途中コース偵察に行ったが夕暮せまる中での判別は困難を極め、隊員の疲労と行程を考えれば今日中に辿り着くことは無理と判断し水のある別の沢を求めて一泊した。18日テント場横のルートと、渦沢である本ルートを2班に分かれて偵察する。私は隊員2名と共に、樹木を切り倒して

進みテント設営予定地点に到着したのは昼前であった。しかし、この水は干上っていたので水のある約1キロ上流にベース・キャンプを設営する。このテント場は水には困らぬがアブの多いことといったらゴミ捨て場のハエの如く、挙句のはてには10分間に200匹のアブを殺したと自慢する隊員が出てくる始末である。このような状態では、休息日といえども、まともに身体を休める場所がない。洞窟周辺の残雪や洞内雪渓では身を凍らし、テント場では、太陽の下で水浴びをする。体温調整も大きな課題である。以上苦労話しを中心に述べたが、洞内アタックのことに関しては他氏に譲ることにする。最後に私自身3度の青海小穴調査に参加して、探検活動に於いて「人間の和」程重要なものはないということを痛感した。この「人間の和」こそが、どのような悪条件のもとであれ、自然に挑戦し得る最大の武器ではないだろうか。

第2次・第3次青海小穴調査

——そのリーダー記——

三 戸 忠 弘

行動した後でその事前のことを考え、思い起す事はほんとに容易である。現役が、最大の難事として、行為し、挑戦してやっとの思いで征服したことを、それが当然の事のように気軽に、平然と越えていく姿は、たのもしくもあり自分にとってはチョッピリ、淋しい事でもある。第1～第3次の青海千里洞の探検も、漠然とした偵察を頼りに、千里



第3次青海小穴調査隊員（洞口にて）

洞の実態を、手探りで、浮び上がらせてきた。私達が現役として活躍出来た第1～第3次迄の探検ではとうとう千里洞の核心を捉える事は出来なかった。しかし、私達が残した千里洞に関する